

# 集團化の諸次元

中 島 龍 太 郎

## 一

課題、従来の社会学理論に於ける類型学的な固定的な集團概念による、集團に対する要素分析的なアプローチと正に対立する立場から社会集團を動的全体として把握しようとする動向は、それが「集團研究の新たな段階」と指称された様に(一)、集團もしくは集團化の過程を主要な関心焦点に指定し来つた社会学理論に対して劃期的な意義を荷うものの如く思われる。右の新らしい動向を玩味しつつ、社会集團理論に於いて従来踏襲された所の、集團及びその過程に対する平面的靜態的な側面觀の適用に代えるに、立体構造的かつ動的な次元觀の適用を以て、前者が回避し能わなかつた困難や撞着から解放する企図を具体的に示すことがこの考察に課せられた仕事である。次元觀に基づく集團認識は、人間の営む集團生活の形相を、それぞれの領域に分かれて孤立化しつつ、しかも同一レベルの次元領域に展開されるバラエティとする見解を排除し、連続的ではあるが実質的な性格乃至段階を決定的に異にするいくつかの次元領域により複合的に構成され、つある姿として理解せんとするものである。それは単なる靜態論的な構造的な概念図式の構想を意味するものではなく、かえつてこの様な構想を必然的に生起せしめるにいたる動的過程の分析に最も好便な概念的枠組の設定に外ならない故に、具体的な事実によつて今後その妥当性が検証せられる機会を待つ一の議論である。もとより右の構想の採用は、一面に於て従来慣用され来つた一般的概念図式の改編を要請すると同時に、他面実証的研究に必要とせられる新たな理論的前提の提起を意味し、ひいてはそれが社会集團の組織や統制等を繞る実践的課題に対する集團研究の新らしい立場をも要請するであらう。小論は、これ等の問題に関して今後展開されるであらう一連の研究の序章として、右の考量を必要とせしめる



に至つた諸事情とこれに対する見解を要約し、主題の意味する所の骨子を明らかにすることを当面の目標とする。(註)  
 註 筆者は前稿(2.)に於て、階級(層)問題の一環としての「知識層」の問題について若干の考察を試みた。その際特定の具体的乃至個別的な特殊問題の取扱いと併行して、必要とされる概念設定や一般的規定を合わせて検討しつつ敘述することの困難さと、これを招く最大の理由の一つが、旧集團理論の枠組みに対する不満に基づくことを痛感した。従つて前稿の主題の展開と一応別個に、先づ一般集團理論の再検討を行いその枠組みを再構成する必要があるが、この考察を生み出す直接の動機となつたのである。

## 二

予備的省察、さて集團理論を中心とする社会学的研究の推移は、若干の特徴を具えた時期乃至段階を経て今日に及んだことが顧みられる。例えば Homans は自らの集團研究の属するそれを研究展開の第四期に位置するものと考え、先行する第一期は Comte, Spencer を中心とする初期綜合社会学時代、第二期は Pareto, M. Weber, Durkheim によつて代表される時代、第三期は兩次の大戦には含まれた、多くの示唆的研究や特殊社会集團に関する詳細な研究が行われた時期とする。これを継承する現段階は、前代に打出された個別研究の限界に鑑み、その構想を集大成し、明確かつ一般化された綜合 Synthèse に化せしめる仕事が残されている。即ち Homans によれば、過去の理論の或るものは、特殊集團を対象としたが尙充分な一般化を必要とし、他の或るものはその諸側面や暗示を以て暗黙にヒントを与えるが、一字一句をおろそかにせず含蓄を汲み取るに骨が折れるし、更に或るものは美事に一般的かつ明快ではあるが部分的に止まりより多くの要素の附加を必要とする。要するに既存理論の右の欠陥を Synthèse の確立により解決することがわれわれの仕事であると強調するのである。(3. p.3) Homans の示した時期区分については、その第三期(特殊研究の時期)はその理論的成熟を現代に持ち越して居ると見る限りに於て、これを一括して扱つても差支えないと思われる。既により廣い学史的展望の中に右の集團理論の展開を跡づけられた前記論考(二)は、集團えの社会学的関心の大きく变化した事情を三つの歴史的段階に區別し、その特徴を次の如く概観される。第一期(初期社会学時代)、この段階の関心の焦点は斷片的附随的に取上げられた特定の社会集團にも集團一般にもなく、全体社会としての近代市民社会にあつた。第二期(一八八〇年代以降の形式



社会学を中心とする) 集団が最も中心的な課題となつたこの段階では、社会集団の本質、その特質、種類等が組織的かつ体系的に問題とされる。所で右の第一より第二の段階への推移は、時代的背景としての上昇期ヨーロッパ資本主義の相対的安定期より、その矛盾を露呈するに至つた下降期への基調の変化に対応し、動的有機的な全体社会の総合認識より、その全体性への自信の喪失に根ざす静的分析的認識への転化過程である。後期に取上げられた社会集団は、前期の対象たる全体性、歴史性の否定を意味する「歴史を超越して普遍的に存在する集合的範疇」としての社会集団である。我々の継承したこの段階の集団研究の特徴は、一、全体社会(近代市民社会)への関心認識を断念させるかくれ簑としての役割をそれが果すこと、二、非歴史的な人間性を基盤とする演釈や集団の共通属性の抽出による本質追求から出発し、おおむね二分法的類型学的取扱いが展開され、三、獲得された固定的な類型概念と現実の集団事実との関係が哲学的形而上学的に論議される。右の既存理論への構造的欠陥への反省の上に構築せられる第三段階は未だ初まつたばかりであるが、少くも一、社会集団の単位が認識関心の集中する所にその成立を見る立場よりして、その概念は verbal より operational に、動的全体に即して固定的構成を避けて流動的(相対的)に構成を企図され、一応独立に存在するものとして抽象的に把握されたかつての集団は、今やいずれの集団も環境裡に位置するものとして、歴史的に限定された situational な状況下に於て把握されんとする。二、前段階で敢て無視された全体認識は、それが可能と見做される限りに於て、研究対象となることを免かれものではない。ただ社会学がその任にたえるためには体系の全面的改編を避け得ないのみならず、既に資本主義社会の展開過程に不斷の追究を累積して来た「市民社会の解剖学」が存する。社会学的认识はその能力にかんがみ、また、前者から区別さるべき特色を持つ為にも、差当りそれを取扱うに充分な可能性と資格の期待される徹視的觀察の役割を果たすこと、即ち単純で基本的でもある小集団の問題を端緒として出発し、その認識を桿杆として全体社会に及ぶ体系的理論展開への方向が志向されて然るべきである。

右の要約が誤りなく伝え得た限りに於て、過去の集団理論に含まれる欠陥の指摘についてはこれ以上ふれない。ここで



はその反省に基づく基本的要請として、右の論旨に含まれる次の二点をこの考察の前提とする。即ち、一、動的過程としての集團事実と集團概念を峻別し、固定的集團概念に代えるに流動的現実に即した概念の枠組みを意図する。二、集團の孤立化に代えるに、特定環境裡に位置するものと認められた、歴史的限定下の situational な状況下に集團事実を把握する。——あたかも冒頭提示した次元観の提唱は、右の概念設定と状況的把握を可能にする理論的裝備として以下示される通りである。

所で右に述べられた問題の背景なり意図なりに根ざす考察の前に「新らしい段階」が意味する若干の基本的事項に関し、あらかじめ私見を附加して起り得べき誤解を避け、また論者の立場を明らかにして置き度い、第一は、新段階の考察の帰趨する所が、単に新旧の概念図式の設定の更新という理論領域の問題に止まらず、旧来の理論社会学(学説研究)に附与され期待された演釈機能と役割の在り方を根底から変化せしめるであろうことの認識である。それは Merton の「中範圍理論」Theory of Middle Range の提唱と Homans とよんで試みられた Synthese 追究の方法の示す通り、従来われわれが受け容れて来た思辯的理論の果す役割は——たとえ優れた示唆や深い洞察を含んでいようとも——次第に事実に対して説得力を具えた通貨的役割を果すものとしてはも早期待し難くなりつつあること、即ち、自然科学に於てつとに確立されて来た理論本来の機能が、集團理論について自覚される迄の永い形而上学と試行錯誤の歴史が、今やようやく新たな担い手に取って代られる段階に到達したことを意味する。(註)

註 Merton の「中範圍理論」の提唱が理論研究と実証研究の相互媒介の結果期待されるより高度の抽象段階への過程として主張されたことは周知の事実である。彼は社会調査の理論的性能に關説し、經驗的調査は理論を吟味しテストするという受身の役割を果すに止まらず、それ以上に積極的な役割即ち調査が理論を導き initiate 再構成し reformulate 焦点を移動せしめ refocusing 更にこれを明晰化 clarify するにより、理論そのものの発展に寄与し得ると述べ (4. p. 97) また「明白に方式化された理論が必ずしも常に經驗的調査に先行しないこと、あたかも理論家が必ずしも新觀察への途上を照らす燈火たり得ない明白な事実の通りである」(4. p. 111) として、両者の reciprocal role を強調している。また Homans の所謂 Synthese の含む所が、単に特殊研究と一般



理論とのそれに止まらず、研究目標たる「諸集団に於ける人間行動に探知される連関的統一性」(The interconnected uniformities detected in the behavior of men in groups)の獲得を、先づ必要とされる概念図式の輪廓を明らかにし、次で詳細な事実の記録を明示して分析を事実即して進行せしめ、データの要求する場合はそれに応じて更に新しい概念が導入され、かくして観察された行動に対する人々の理解を豊かならしめると云う「理論と資料との成熟に達した効果的協力」の手順に依拠して居る事実によつて、理論とデータとの *Synthese* をも意味する *Merton* が指摘する通りである。(3. xix)

第二に、ここで理論や方法と対蹠的に理解される実証的研究乃至資料については、各種の認識レベルに位置する多様な性質のものが存しているが、理論認識に対する機能に関する限り、その何れの段階性質に在るものもそれぞれ価値が認められ、また無視されてはならないという事である。小集団に適用せられる実験的調査、所謂 *Field Survey*、資料調査、古文書や伝承による調査、これ等の実証研究の方法、内容、性格は様々であるが、それはデータを包含する現実世界の廣汎な領域を示すに足るものであつて、単にこの内何れかの形態に固執すれば却つて実証研究の機能が限定せられざるを得ないであろう。すべての理論に適用される「統合化された概念図式」を一挙に求めるよりも限られたデータの系列への適用可能な特殊理論を發達せしめる事が今日の課題であるとする *Merton* の主張や、「可能的に到達し得る差当りの目標」が、それをめぐる手だての容易な「ミクロズムの総合」に集中されて然るべきであるという *Homans* の確信は、何れも客觀的かつ正確と見做される資料獲得に容易な「一定レベルの調査研究」を予定するものであるが、か様な調査は主題の内容と、調査そのものの実施に与えられる *Situational* な状況やこれを可能にする条件に依拠するという点が銘記されねばならない。その限りわれわれは既に実証的データを活用した先駆的業績(例えば *M. Weber* や *E. Durkheim* の宗教社会学的研究の如き)にならつて、可能な範囲内に於て各種資料の持つ相補的意義を重視活用し、実証研究が陥り易い個別的現在的平面への執着と、悪しき実証主義への偏向を戒める用意があつて然るべきであろう。右の実証研究との関連に於て要請される第三の問題点は、集団研究に負荷される実践的課題の重要性に係わる。一般に科学研究はそれが有用であることよりも、関心を呼ぶ理由から企てられる場合が多いし、実践上の有効性や評価と、科学認識の妥当性(正しさ)とは明らか



かに別個の問題として區別し得るであろう。それにも拘らず社会科学の研究の多くが、研究自体科学者の主要な社会的実践の方途に外ならないことの故に、常に現実を生起する実践的課題に何等かの仕方では答える意図を以て進められて来たことを多くの事例が教えている。(アメリカの産業社会学的研究の急速な展開が、所謂「人間関係」の強調と分析を必要とするに至った現段階の労資間の調整乃至協調や人事(労務)管理の円滑化の実践的要請に対応して現われたこと、その故にこのような研究の焦点が spontaneous co-operation の強調(回復)を焦点とする<sup>1)</sup>とはこの間の事情をよく物語る) (10. Foreword by & Mayo) 集團生活の過程に示される多くの実践的課題(集團の形態、組織、制度の問題)が科学的知見の参与を求め、現にもろもろの応用分野(家庭問題、犯罪対策、教育効果等)に於て研究者がこれ等の実践的問題と真剣に取組んでいる事実の示す通り、社会調査に於けるとやや異つた意味に於て単に理論の実践への寄与という一方的關係に止まらず、却つてそれが理論を傍証し、更にその変革の契機をも提供している事実が認められて然るべきである。(註)

註 自然科学を模型とする「実験的調査」の要件が、「要因の統制」「被験者の装置に導する反応の処理」「状況の再構成」等の事情につき大きく制限されている社会科学の場合、大規模集團に対する実験的機能は、実践的課題を生起する諸過程に予め用意された理論的装備を以てする参加を通じて有効に發揮されるであろうこと、従つて、諸制度の改革や社会的諸計画の遂行過程の中に、予め科学的予測の提示する命題と現実の事態との比較検討を通じて、基本的な(すべてではない)条件や要因に関する考察の検証が意図的に可能となると認められる。この点 Lundberg が「ヒートピアコミュニティ」や「社会立法」を科学的実験の前階と指定した考慮(5.64頁以下)は、一層深められる余地を残している。小集團への実験的方法の固執は、場合により却つて科学の現実への関心と機能を冷却せしめる怖れを誘うことが注意されよう。

実践的課題の集團理論への寄与に関しては尙次の点が附加される。第一に、実践的課題と取組むことの重要性の認識と、集團理論によつてこの種の問題の処理が可能かどうかの実状の認識とは一応異つた事柄である。この点に関しては、「われわれは多くの概念観念、アプローチを所有しているが、確定的理論や公理や目標の完遂につき、殆ど知る所がない」と Merton の言葉(4. p.9)が模索的段階の現状を要約する。第二に、集團研究の網の目にかからず、科学的分析の光を受



けず放置されている豊富なデータの存在である。諸団体、組織、機構等をめぐる人事、労務、運営、組織等に関する報告や記録を初め、政策的戦術的課題、社会・労働・政治運動に関する論策及びデータは、社会集団の形成過程の理論的省察に大きな示唆を与えるものとして顧みらるべきである。第三に、社会学的集団理論と係りなく、もしくは否定的に展開されて来た立場よりする実践運動の批判・検討・指導の論策が改めて取り上げられる機会を要請する。例えば史的唯物論（階級分析）の視点に立脚する組織論や集団論は（13.）階級集団理論就中特定の歴史的状況下に生まれた戦畧戦術論を中心に展開されているが、その一般化が方法、理論・実証の総てについて「新しい集団理論」への大きな刺戟と貢献を約束するであろうことが期待される。

以上理論対実証・実践の関連に接続する第四の問題点は、マクロ認識とミクロ認識の有効な協力態勢の確立に存する。此の点に関しては、別の機会に公にした見解（6.）と重複を避ける意味からしても、その結論だけを示すに止め度い。即ち既に指摘された所の、集団研究の第二の段階に於ける全体社会（市民社会）の無視に代つて、「新たな段階」に於けるそれが「実証的能力の限界」なる別個の理由の下に前者と同じ轍を踏む危険を率直に認めざるを得ない故に、換言すれば、上昇と下降の二期に対比せられた論法が實際的独占資本の危機と両体制共存なる現段階に適用せられる場合、まさに中心的課題として提起さるべき全体社会そのもののえの認識がその集団理論に於て謙虚に回避される事態の意味する所を深く反省するが故に、実証的研究領域と方法の拡大深化と、実践的課題への接近を契機とする理論認識の妥当性を吟味する必要の強調と併せて次の考慮が附加され得るかと思われる。一、相関連する *Dynamic whole* としての諸集団及びその複合としての全体社会は、改めて集団認識の対象とし当然指定されて然るべく、二、通常規模のより大なる包括的な集団過程に貫徹する歴史的法則性は、これに下屬もしくは連繫する他の集団過程にも浸透・規定・影響を与えつつある状況の理解を通して、三、一般に特定の問題関心に依拠すると見られる要因や *Situation* の設定を、まさに客体たる変動過程に忠実に即応する追跡の中から用意する態勢を確立することである。かくして期待さるべき「市民社会の解剖学」と「社会学的



「集団理論」の漸次的接近、就中後者の再編成の課題は ideological imputaton の論議を焦点とすることなく右の方向から必然的に帰結さるべき新たな集団認識を別に要請するに至るであろう。

三

**集団と集団化、** あれわれの形造る社会集団には種々の形態・機能・性格等を具えた多種多様のものが存在している。従つて集団に対するアプローチも、集団現象に特徴的と認められる幾らかの主要な指標に従つて、例えば、1. 機能・目的、2. 組織化乃至秩序付け方、3. 規模の大小及び一般性、特殊性、4. パーソナリティー形成への底礫性、5. 発達乃至形成の段階、6. 集団意識とその程度等々の相異つた角度からの究明が可能となるし、事実そのことは在来の集団理論の概念規定がこれ等の指標の若干の組合せに依つて可成り恣意的に試みられて来た成果の示す通りである。所で従来の研究の成果との連続と区別を明確ならしめる必要に基づく第一の要件は、Merton の指摘 (4. p. 49) を待つ迄もなく社会集団の多様性を統合化する役割を容易ならしめるために、明確化された最少限必要な規定から出発することであらうかと思われる。

註 Merton は Functionalism の理論的基礎付けを論ずる際、理論の明確化に寄與する「形式的範例」Formal Paradigm の重要性を強調し、かつ「範例」中に含まれる諸要素は大部分自己を含めての既存の研究成果の裡に「発見」されたもので、決して「発見」されたものではなく、またそれが社会学的分析に援用せられる諸仮定・概念及び基本的な諸前提の完全な系列をあらわならしめることにより「ランダムな論理的に結び付いて居ない諸々の思索や沈潜や註釈のヴェイルの背後に秘むところの分析の核心をかくさんとする不注意な傾向を最少ならしめる価値」を強調している。

所でノミナルな社会集団一般の規定は、集団事実そのものの性質及び集団理論の性格を反映して可成りのバラエティを以て語られている。例えば「社会集団は多くの場合、それを構成する人々の間に、何等かの程度に於てお互の生活や仕事を共にして行こうとする所の結合関係が保たれて居り、またそのことによつて人々の行動なり意識なりが、ばらばらなものでなしに何ほどか或る一定の方向に組織化され、統一化されている所にその特徴を有するもの」とされ、また他の説明は社会集団が「それに参加する生きた人間、その行動によつて構成され、そこに一定の行動様式と認知し得べき組織があり、共通の価値感情や価値体系」がありつまり「人間がそこに於て一定の結合関係に入っていること、また入ること」を



意味すると説明される。此の様な説明が抽象化された一般規定として必ずしも具体的事実に対応する明確さを示して居ないことは、それが単に抽象化の困難に基づくものではなく、実は *situational* な一般的状況の下に集団をしてかくあらしめる本質点が明示されず、為に例えば「結合関係」なる一般概念の提起によるトートロジカルな代替的機能を果すに止まることを意味する。ここでは此の様なあれこれの特徴の提示に集団概念の含蓄を象徴させる仕方を止めて、これ等の概念規定にも共通する一般的事項として、「個々人の行動に対する社会的規定性の及ぶ範囲」を社会集団として把えることから出発しよう。社会的な規定性とは、複雑以上の個人の存在するそのことに依つて、彼等相互の間に一定の仕方での行動が *situational* に限定されている状態を意味する。それは第一に、事実上の規定性の存否に依拠する故に、例えば構想的集団（統計的集団）として提示される廣義の集団の概念と區別される。第二に前述の説明に述べられた行動様式の存否が所与の条件の下に核心的事実として取り上げられ、組織化や結合関係（価値感情や体系の一致）を最少限、必須の要件とは見ない。（これ等の語の意味する事実が集団化の一定の段階に於て初めて必要とせられることを明らかにすることこそがこの考察の主要なモチーフである）、第三にこの規定は、従来の集団概念の裡に明確に、あるいは暗黙の裡に認められて来た前提、即ち直接的接触乃至その可能性の有無や心理的な意志交流 *communication* の存否に直接左右せられない。人々の行動に対する規定性の存する限り、その在り方によつて人がさまざまな社会集団を形造ると見做される事實は、例えば友人仲間、家族、組合、階級、国家等の様々の集団現象に共通する所であり、そこから出発することが却つて特定集団の特質を他に強制することなくして具体的事実即した集団理解が可能となるかと考えられるからである。（註）

註 實在的集団概念と構想的集団概念の區別については「社会集団と諸個人 *Individuals* よりなる、範疇へ及び単なる、集合へ *Aggregation* とは、後者が単に分類者の思念に於てのみ存する故に區別さるべし」ところ Hertzler (7. p. 17) の説明や、社会心理学的見地よりする、共通属性に一括された「集合体」*Aggregates* と社会的範疇としての相互作用そのものにより形成される一般の人々を指す集団 *Group* を區別する Hartley の見解 (8. p. 372) が参照される。Sombart の *echte Verbände* と *pseude Verbände* の區別は一般的ではあるが、その區別の標識が「精神的結合性」*geistige Verwandtheit* なる特徴の存否におかれる限り小論の



見地とは必ずしも一致するものではない。實在概念と構想概念との區別はしかしながら、後者の認識手段としての意義と役割を決して否定するものではないこと、所謂操作的概念としての「集團」の論理的性質が後者に属することが注意されるべきである。尙ここでアメリカ社会学の主要文献に基づく社会学的基本概念のノミナルな比較を試みた Timasheff の一研究 (9) によれば、social relation の hierarchy に含まれる III のレベルを示す術語 = social system, social group, society は不幸にして最も混同されて用いられている。「社会集團」に関する諸家の定義の主要なものは、(1) 複数体 plural, (2) 集合 aggregation 乃至相互作用のある種の持続 (3) 組織体 organization (4) 所属員間の連帯性、(5) 価値、目標、規範を共通にする一群、等に示される。最後の項に示される諸要素は Nadel, S. F. のように、「集團の成員による、彼等相互に向けられた特殊な、予測され期待された仕方 Pattern に於ける活動 acting」によって表現されている。Homans は、「A・B・C・D なる人々は、所在の一定期間に A が M・N・O よりも一層頻繁に B・C・D と相互作用を営む場合、彼等は集團を形成する」と述べ、観察者の焦点如何によつて相対化される operational な集團規定を Lundberg と共にする。これ等のノミナルな定義はもとより論者の附與する實質的な意味を直ちに明らかにするものではないとしても、形式化された論理的前提として爾後の考察を導出する機能は重視されるべきであろう。尙行動の社会的規定性を基本前提とする小論の見地に最も接近した表現は Nadel のそれである。

擬社会集團なるの語の意味する所が、諸個人の織りなす行動が何等かの仕方によつて規定せられる場合に成立すると見る場合、人間行動が本来動的過程と見做され得る本質に対応して、社会集團の存続もこの行動の上に展開される所の不斷に変化する動態に於てあるものとして所謂 going concern に於ける具体的様相に於て把握されるであろう。この現実態に即するならば、集團の固定的存在を前提としてその変容の形相としての集團過程を見るアプローチとはまさに反対に、集團過程そのものが与えられた集團事實の眞の姿であるとの認識に立つて、そのダイナミックな展開過程の裡に示現する人間の社会的行動の規定性の消長に応じて、社会集團の形成、持続、消滅の諸相を究明する立場が提起されてくるのである。ここでは、社会集團の相対的持続を許容する右の集團過程＝行動規定性の変動態を以て、集團化 Grouping なる進行形に表示せられた生活過程を意味せしめ集團化の過程から逆に社会集團そのものの存続へと洞察の方向が企図されるであろう。(思弁的な仕方)に於て右の認識方向は既に形式社会学派の「社会的相互作用」なる過程より形成される V 社会形象へ soziale Gebilde の認



識に具体化されているのは周知の通りである。ただそこでの抽象化過程が、条件発生的な situational な状況把握をほとんど捨象して、即孤立的普遍的事実として説明せられた事が顧みらるべきである。集団化の過程は、共存する諸個人の生活行動に具体的な規定性を欠如する集合なる前段階から、特定の個人間に生起する行動の共同、意志の疎通、態度の交換の如きを介して、漸次諸個人の行動及びそれに伴う意識態度の一定の方向づけ（様式化）が行われ、やがてこれら諸個人間に各自の受け持つ仕事の役割や資格（地位）づけやその秩序づけ（組織化）が明確もしくは暗黙の裡に定めらるに至つて、この範囲に属する諸個人に他のそれに属する人々と区別せられた自覚や感情を生み出すに至る。社会集団の具体的な形成の姿は正しくこの様な段階を逐次もしくは同時に経過を示すものであり、またかくして形成された社会集団消滅の過程は右の推移に遂行する向方をとる所の、吐喩的に云えば十に対する一の形で展開される行動規定性の減衰の姿である。換言すれば、社会集団の形成と消滅とは、結局は集団を基礎する行動そのものに対する社会的な規定性の消長の過程を、またその限りに於ける諸個人間の共同行動乃至協力の展開過程が、人々の範囲や共同（協力）の強度、性質、持続性等の多様な分化を伴いつつ示される姿に外ならないのである。所で右の集団化の過程がさまざまの situational な状況の下に於て、比較的明確な姿をとつて観察の対象として示されるのは、行動規定性の発生的、終息的および更新的な時期乃至段階に於ける集団化の形相である。Homans は集団をそれが特定の環境裡に条件づけられている行動要素の相互依存態としての外的体制 external system とそこから生起し、しかもこれに反作用する集団行動の elaboration としての内的体制 internal system より形成されるものと見ているが、環境の圧力により生み出される外的体制からこれと相対的に区別される内的体制の成長を観察するチャンスは、ただ新しい集団が特殊な任務を果すべく形成される場合に於て与えられると述べている。（3. p.152）この点われわれは、集団化過程の顕著な特質が、例えば家族生活に於ける婚姻や出生を契機とする新しい単位の形成の時期や相続や死亡による継承の転機に於いて露わとなつて示されることを知つてゐる。またパーソナリティの形成に根ざす個人の将来の動向がすでにその出生と幼年期に大きく左右され、個人の業績がその死亡に際してよく評定せられる様に、更に危機



に際して却つて集團の連帶性や拘束性が強化せられ、革命の動乱に於て民衆の意欲が昂揚を見ることが、概して反覆恒常的と見做される相対的持続の安定期に潜在化する集團化の諸要因は、劃期的な段階に於て極めてドラマチックな集中的表現の場所を容易に見出すことが可能となる。かくして集團化を積極的に推進せしめる力とこれをチェックする力の相剋乃至矛盾の場として把握されるわれわれの社会生活は不斷に変化の過程にあるその特徴的な断面を把えることによつて、ヴィヴッドな集團化の実相を明らかにし起り得るであろう概念と現実との乖離撞着から免かれるではなからうかと思われる。

#### 四

**集團化の三次元**、ほぼ右の考察によつて明らかとなつた集團研究の史的背景と、主題の展開にあらかじめ必要とされるであろう若干の予備的省察に於て、従来の側面觀的集團理解が抽象化された或る種の特徴を一般的規定に迄拡大指定し、ために「あれかこれか」という概念内容に対応する、「あれでもありこれでもある」集團事実との乖離が必然的に生起する事態を指摘する所があつた。ところで、この事態に対処する常套的手段はほぼ次の如く展開される。即ち先づ集團概念の事実との対決より翻つて、それが選択されもしくは導出された概念そのものの内容に賦与した論者の含蓄の洞察吟味と解釈に關心の重点が志向される。その結果概念内容の恣意的拡張解釈に基づく諸種の分化が行われ、本来一義的たるべきものの甚だ相異り、もしくは相矛盾する内容を一語の表現に託する結果がしばしば具現する（社会学的集團概念の多義性が「所與の概念の下に包括されるデータの性質を明らかならしめる」という概念的明晰化の機能）（4. p. 88）を著しく困難ならしめる理由がここに胚胎する。次には本来仮説的前提として提示さるべき概念を固定的恒常的狀態として実体化して用いる故に、拳証は殆どつねに現実の集團事実のある側面を、まさに検証の容体となるべき当の概念そのものの妥当性を傍証する如く提示される傾向を持つ。かくして、拳例は証明よりも辯護に役立つ「悪しき実証化」の危険を多かれ少かれ免かれ得ないことになる。右の傾向が抜本的には事態の狀況的な把握を忘れた態度よりの当然の帰着点と認められるならば、その弱点を克服する新しい見解は前者とは異つた仕方にて求められねばならぬ。Homansの提示した集團化の具体的スケッチをその



手掛りとして参照しよう。(3. p.50—52) 彼は Dickson と Roethlisberger に依つてまとめられた有名なウェスタン電気会社の調査報告を材料として、集団の内的体制の外的体制に対する *reaction* の過程に関し次の様な説明を行つてゐる。

1、ここで集団と指定された継電器工場の観察室に居る人々は、その環境をなしているホーソン工場や諸集団(例えば家族)の環境的圧力の下に、またその集団をして環境裡に存続せしめる条件によつて決定される外的体制を形造る。環境と集団の間に成立をみる *initial* な関係は、その集団が存続する前提をなしている。2、右の原初的關係の確立に続く若干の結果は、外的体制裡に人々を結び付けている「やり方」*manner* が彼等のかくされた能力を解放するにつれ、人々が当初に抱いた個人的関心と異なる所の、他人やグループに対する好嫌の様な新しい感情が表現される様になる。環境がホーソン工場管理といった形で部分的に妨げようとする様な新しい活動——手助け、仕事のとり引き、ゲーム、論争、おしゃべり、空騒ぎ等が初まる。新しい相互作用の様式——仲間の組成 *association of clique* や、リーダーを中心する *communion* の組織の創成——が自から仕上げられる。環境の圧力によりそれが直接的には決定されない故に外的体制と區別される集団の内的体制は、前者に接続しその中から生まれてくるものであつて両者の過程は循環的 *circular* もしくは有機的 *organic* であるから、その境界は任意に引き得る存在である。例えば集団のもつとも容易な可測的反應の一つである出来高 *output* について見れば、それは環境的諸要因によつて決定されるのみならず、集団の規範やこれを結び付ける社会的地位の関連の如きによつてもまた決定される。要するに外的体制は、前者のみによつて期待されるであろう所の環境えの反應を變容 *modify* するのであるが、その變容も決して集団が環境裡に存続することを妨げる程大きなものではないことと見做されるのである。

右の Homans の説明からわれわれは集団が形成される過程に於ける二つの主要な側面、即ちそれが一定の環境の圧力を受けつつ、しかも集団独自の体制を形成するに至る展開を知り得るのであるが、同様の事情は工場内の集団に就てのみならず他のあらゆる場合に於てはめても容易に看取することが出来るであらう。その場合に認められる *external* と *in-*



tenalなる二側面は例えば Maclver 等によれば環境と個人乃至個人の入り組む社会関係より形成される社会集団との関係としてしばしば考察の対象とされ、また「人間は形成されつつ形成する」という言葉に集約される所謂主体としての個人 personality と客体としての社会 society との有機的連関としても説明された所であつた。ところで問題は Homans の所謂内的体制と外的体制との関係は、全体として自己完結的な、また相互依存的な過程として循環的反覆に止まるものであろうか、少くともそこに二種の相異つた要因——環境の圧力と集団的自発性の志向——が、特定の与えられた条件（工場という）の下に相對して働く dynamic process としての集團化の裡に對極的に存在していること。両者は相互に影響を交換する限りに於て相互依存的であり、それが工場単位の集團化過程の反覆と見做され得る限り一の有機的な自己完結的全体のなすものの如くではあるが、しかしながらその関係は飽迄對立を含んだ統一であり、矛盾をはらむ対応の姿であると見ることが出来る。（かかる對立・矛盾を含む故にこそ、環境の要請——例えば勞務管理方針——に對する人間協力の自発性—— Human relations の認識——が別個の領域の問題として要請せられるのである）此の論旨を今一歩進めて、敢て次の様に主張することが出来る。今ある特定の集團に對象を限定するならば、その集團化を促進せしめる一切の外的環境的要因の働く力は、これを内面的に維持せしめる「人間的」な志向と異つた次元の下に狀況的に具現する。前者を貫徹する法則性を仮に客体的法則と呼ぶならば、後者に於て形成されるそれは主体的法則として示されるが、右の相互関連に基づく法則の浸透、貫徹の過程は決して円環的自足的なものではあり得ないと考えられるのである。先の例示によるならば Homans の所謂環境の圧力は、工場単位の集團に對する工場全体の分業組織の一環として課せられた種々の制約として示される。然るにかかる制約は工場をその一環とする会社なる企業組織の、アメリカ産業社会に存続する基本的条件によつて根本的に制約されて居り、この根本的制約が他のさまざまな環境諸条件に示される圧力と結び付いて、繼電室なるスモール、グループの形成に initial な役割を果たしつつ、それに属する諸個人の行動を具体的に位置づけていると云える。然るに他方に於て、かく形成された集團員相互の交渉の過程に於て自然發生的に生起する新しい感情、グループ独自の活動、新らしい相互作用



用の様式のごときは、人間が集団化の過程に於て逆に環境を形成する主体的な活動の所産に外ならない。それは屢々環境的に指定せられた様式を改変し、多かれ少かれ集団独自の *elaboration* のモードに従つて集団成員の行動を規定するに至る。この二つの集団化の過程は必ずしも同時に現われるとは限らないし、同時継起の場合に於ても *pressure* の根源が環境的条件下の各種要因に歸するに對して、*internal development* の根源が究極集団内個々人の意識に根ざした自發性に根拠を置く限りに於て、それぞれが異質的な別個の集団化の領域を形成するものと考えられる、かくして従来 *large society* や *small group*、*internal*、や *external*、集団化の主體的側面と客體的側面、環境と集団乃至諸個人等々の対応乃至相互依存の様相として對極的に指定された概念図式の設定に代つて、異質的な諸過程を含む集団化過程の多次元的複合態として社会集団の枠づけを行うことが必要とされるに至る。ところでこの様な試みの可能と見做される裏付けは、既に従来の集団研究に於て示された集団構造論や類型概念の構想そのものが与えてくれるであろう、平面的次元（靜態）に於て特徴づけられた集団規定性を、実は異つた諸次元（動態）に對應して指摘された集団化過程の表現乃至理解として翻案する時、まさに必要とされる新しい枠組みに必要な材料をわれわれは用意し得るのである。ここではその主要形態を三つの次元領域に設定し、それぞれの意味する所を要約説明しよう。

A 客觀的次元社会集団を形成せしめる集団化の過程は、いかなる場合に於ても常に特定の歴史的限定の下に於ける環境諸条件に規定されて生起する。しかして集団に属する人々がこの環境諸条件を共にする事実によつてその具体的な行動を一定の他と區別される仕方規定せられるそのことによつて、集団そのものの本質がまさしく明らかにせられるのである。繼電室内の工員が労働者としての条件の下に規制せられる行動の共同性を疎外しては、その集団化の構成にあづかり得ない様に、客觀的（環境的）次元は一切の社会集団を基礎する普遍的な場所を形造る。ここで注意すべき諸点は、1、それが集団化の規模内容の如何に拘らず常に存在すること、2、廣義に於ける客觀的次元の集団化は、スモール・グループに於いて示される所の、集団成員間の相互接触と、個人又は集団に對する主体的意向や価値づけの意識化を必ずしも伴



うことなく成立し得ること、3、それにも拘らず右の集團化により形成せられた社会集團と「集合体」とは、環境裡に形造られる客体的諸条件に基づく行為規定性の事実上の存否によつて區別せられることである。ところでこの客観的次元に於て営まれる集團化の過程及びそれにより範圍付けられる社会集團の主要な形態としては、集團過程としての階級分化や近代的分業化の過程に依つて形成される近代的階級や、また工場内部に設定される作業集團をその典型としてあげることが出来よう。また派生集團と區別せられる基礎社会の語の意味する所も、その成立と持続が環境的条件に依存する限りに於て、コンミュニティーや民族に示される如き自生的性格をよく物語るものと言えよう。成層乃至身分と區別せられる近代的階級を、その意識態度の有無に拘らず客観的に措定される所の、生産様式の歴史的発展過程に於て自然發生的に与えられた事実と説く所以は(2)、かかる事実が人々の生活行動に対して果す決定的な規定性が階級をして集團たらしめる所以であると見たからに外ならない。(註)

註

階級を以て「階級状態」を共にする人間集團と規定し、それが窮極的には市場条件と所有關係に因果付けられるとする M. Weber の見解や Marx の「階級それ自体」Klasse an sich の意味する所は、こゝでいう客観的次元に於て形成された集團を指す。なほ、「環境的要素」は一般に幾つかの要因に分類せられ得るが、Hobans によれば 1、自然的 physical 2、技術的及び 3、社会的なものに區別される。最後の社会的環境は最も重要であるが、いま継電室集團を単位とすれば、(a)工場内部の他の社会的環境、(b)工場外の環境(集團員の家族や経済的不況等)、(c)文化に大別される。これ等の環境諸要素は彼によれば社会關係を補助的に決定するものであるが、稀に集團の存続するに唯一の組織の図式しか可能とされていないという意味で、環境が全面的に社会關係を決定する場合もあると述べている(3. p.88-89)。近代社会に於ける階級關係のごときは、後の場合に該当すると見られる。尙社会学に於ける集團研究の基調にもとづき、従来客観的次元の集團化の考察は比較的輕視されて来たことは反省されて然るべきである。

B 主観的次元、集團化次元の第二の状況的設定は既に Hobans の internal system を推進する個々人及びその結び付きが自発的に形成する集團化の過程に認められる様な主観的次元に於けるそれである。ここは「主観的」とは、集團化に於ける行為の規定性が成員相互間の主観(体)的意識の状況によつて主として条件づけられる謂である。この場合、意識の主要な内容は、



例えば *setniments of affection, affectiv content of synpathy and indulgence, intimate sympathy, respect, pride, antagonism, affectiv history, scorn, sentimental nostalgia* 等の語の意味する人間内部の意識的狀態として、集團形成に際しての人々の好嫌の *sentiment* の如きに端的に示されるものであり、それが主として行為者の心理過程を介して表現せられる故に心理的次元と呼んでも差支えないかと思われる。主観的次元に展開される集團化過程は、所謂人間自発性の發現—働き掛けの過程であるが、それは従来の集團理論中主観的側面を焦点とする多くの考察に繰返して対象化され、また過半の集團概念の設定に於けるこの側面の重視の結果取り上げられて来た所である。人々がその集團生活にあつて互に相抱く所の感情や意志、価値観や利害関心等々の内実は、実に人間相互間、また個人自体の行動を常に暗黙の裡に規定する力を保っている。それは一面に於てパーソナリティーの主體的欲求の發現と見做され得る反面、環境の位置づけが意識を通じて反映した結果と認められて来た。Wesenville と Kürwille の前提の下に展開された *Gemeinschaft* と *Gesellschaft* の対概念は抽象的ではあるが一方に情誼や結合感情を、他方に利害打算や分離感情を蔵した主観的次元に於ける集團化の様相の類型的設定であり、また *primary group* と *secondary group* のそれは、面接なる物理的乃至空間的接觸頻度による区分（客観的次元）と、我等感情や親近感の度合によつて區別せられる主観的次元の集團化の過程を重ねて対応化した概念設定であると見做し得るであろう。しかし主観的次元に於ける集團化の特徴をより端的に示すものは、最近慣用される *informal group* の意味する所であろう。それは主として制度化された *formal group* との対照に於て、前記の Dickson や Gardner 等によつて、「現實に存在するが、諸規則等に明文化されていない内面的な集團」として所謂「感情の論理」*Logic of Sentiment* によつて下から自然的に発生したものの *spontaneous development* と説明されているが (10. p.558-9)、その実質がここで述べられた主観的次元に於ける集團化形相を示すものであることは明らかであると言えよう。(註)

註 最近のアメリカ社会学に於ける集團の *informality* 重視は顕著な傾向であるが、それは一部従前の合理化認識反省の必要に基づく



と同時に、伝統的な主体的側面—人間性重視の基調に根ざして居ることが注意されるべきである。特に工場に働く人々の行動や態度を直接支配している価値判断や物の見方や考え方や感情の体系として、人々に最も近く存在する内面的（意識的）な生きた（主体的）組織をそれが意味すると説明される場合、集團認識上スモール・グループに於ける内面的動機を重視する傾向が明らかに看取される。所謂人間関係方針 *Humas relations approach* の要諦はこの帰結である。尙 *Klasse an sich* に対する *Klasse für sich* は主観的次元に迄高められた階級的集團化の形相を指すものであるが、*Marx* が前者から後者への展開を単に潜在的者の顕在化としてでなく、*Situational* な状況下に階級斗争の展開にともなう一定段階の階級の成熟として説明している点は集團化過程の認識に基だ示唆的である。

**C** 間主観的次元 右主観的次元と、客観的次元に於ける集團化過程がその何れか一方、若くは同時に進行する場合に於て、それが相互の集團化の契機を刺戟し合う過程を通じて（環境への働き掛けと、環境に規定された集團意識の促進）、次第により高次の集團化の到達点と目さるべき異つた規定性を示す領域が展開されること、換言すれば個々人の主体的行動の相対的制約と引換えに、行動に一定の仕方を指示する客観的に定められた（必ずしも明文文化されることなく）規定に従つて行動が導かれる事態が導かされる。此の際集團化の過程は、成員個々人の *personal* な *attitudinal* な志向によつて直接左右されることなく、規範 *norm* や制度 *institution* と呼ばれる外在化した一定の秩序づけの方式に従つて展開される。それは **A** と **B** の次元に於ける集團化過程の累積から生み出されるものであるが、同時にまた逆に両次元のそれを媒介する所の過程でもあつて、個人のそれから区別される社会集團自体の相対的独自性を保証する根拠をなす事実を物語るものである。右の諸事実に即して、ここでは間主観的 *intersubjectiv* 次元、又は内容的規定の意味に即して制度的次元とこれを呼ぼう。従来の集團概念の設定に於て具体化された間主観的次元に於ける集團化の様相は、無組織団に対比される組織的集團や団体—*Verband, association* の説明や、*informal group* に対する *formal group* の設定の場合に於て、かなり明白に述べられた所である。（註）

註 *Homans* の集團研究はアメリカ社会学の基調を反映してスモール・グループに重点が置かれ、その主観的・客観的次元の集團化が



主として内的及び外的体制の Activity, Interaction, Sentiment なる三要素の結び付きに示される相互関連の説明を通じて対象化されている。しかし彼は間主観的次元の集団化についても、「活動の図式」Scheme of activity と「相互作用の図式」Scheme of interaction の関係を以て「組織の問題」の内容をなすものと考え、ここでは関心が小集団に置かれる故に敢て組織理論のより高い到達は望まない方がよいと断つてゐる (3. p. 106) また彼は internal system の展開を説明して、相互作用によつて人々の活動と感情の類似が逆に相互作用を強化せしめる結果、成員間に elaboration と standardization のモードが形成され、やがて多数の人々に期待される行動様式としての規範 norm の行為に対する関係と役割に關説してゐる (3. p. 121—127)。また M. Weber が階級に対する身分 Stand を以て典型的な特権の社会的価値承認の下に形成せられた同じ身分状態にある人間集団と呼ぶ時、身分的集団化の契機がここである間主観的次元に於て把握されて居るものと理解する。La Piere は制度を「諸要素の秩序づけられる人間関係の体系」と規定し、特定の社会集団の成員間の相互作用の様式が「あらかじめ決定されたもの」として示される場合の集団を指して「制度的集団」institutional group と呼んでゐる。制度的集団は社会関係の不断の持続を必ずしも必要とはしないがその集団成員の行動は制度的規定によつて制限せられ、一の Hierarchy に組込まれることによつて、各人の地位や個人的機能が指定せられる。それぞれの制度的集団は指導者を有するが、その指導性は指導者目らのパーソナルな関心欲求によるよりも、制度的な体制に依ると説明を加えてゐる (11. p. 339) Hertzler はより端的に、社会集団を企図された第一次的な「文化的形態」cultural configuration として捉え、具体的には法典、規則、イデオロギー及び本来象徴的な、組織的及び物質的道具立 implementation を介して、社会的には標準化され統制された実践や参加の内に、個人的には態度や人々の習慣的行動の内に具現するものと説いてゐる (7. p. 4)

## 五

**結び** 以上の叙述に於て、集団化の過程に即して社会集団が形成せられ、ついでそれが展開せられる三つの基本的な「状況的把握」として、客観的、主観的及び間主観的な三次元 (領域) を指定し簡単な説明を加える所があつた。この際「次元」なる表現は先に述べた如く構造論的概念設定の方式に依拠して与えられたものではあるが、それは事実上は集団化を推進せしめる異質的段階として観察され得ることは右の説明の仕方から明らかとなるであろう。三次元は人間の集団生活に認められる集団化過程の最も主要な形相を一般化した枠組みに過ぎないことが先づ銘記さるべきである。(註)

註 主観的次元と間主観的次元の中間領域に慣習的 conventional に行動の規定される過渡的段階としての中間的次元 (Quasi-Dimension) や各次元内部に分化して存在する準次元 Sub Dimension を別に設定し得るであろうが、その検討はこの考察では論外



する。

ところで三次元に基づく集團事實の理解が既往の類型的概念把握と明確に區別されるためには、右の枠組設定の機能について若干の注意を必要とするかと思われる。一、次元観による集團現象の理解は、類型的諸概念が相互排他的な特定概念に即して事態を整理しようと試みたに反し、操作的立場に於けるとは異つた仕方であり、弾力的な態勢を以てこれに臨むことが出来る。現實に生起する集團過程は決して一次元的レベルに汲み尽くし得るには余りに複雑であり、あらゆる集團は少くとも二つの次元（主観的及び客観的）に於ける同時的な乃至継起的な集團化の展開の裡に成立する。現實をかかる重層的な集團過程の複合と見る限りに於て、そこに秘められた眞実への接近が初めて可能とされるであろう。なおここで集團に於ける *informal* な契機を主観的次元に於ける集團化の契機として、翻案理解すれば、いかなる「フォーマル集團」も現實にはインフォーマルな契機を含むことなくして殆ど存在し得ない故に、對極的な概念設定による現實理解は、異質的區別から程度的説明に移行せざるを得ないことが指摘されるであろう。（註）

註 狀況的に把握される階級的事實が重層的三次元構造として示されるとすれば、われわれは客観的階級と主観的階級の外に制度的階級（身分）を所与の歴史的條件に依存するものとして區別し理解することが可能であろう。Pfaufs が階級区分の位置づけを論ずるに當り、1 *external, objective approach* 2 *internal, objective approach* 3 *subjective approach* を區別して取扱つたのは、図らずもここに述べられた三次元構造に即した現實理解の方式を示したことになる（12. p. 395）

二、次元観による集團理解は、新たな集團分類の一つの基準を提供することにより、その客観的整序への途を可能とするであろう。右の如く二つ以上の次元領域にわたつて展開される集團化の過程は、具体的な個別的集團に対してはそれを集團化の契機が、その集團の存続に對しより支配的もしくは優越と見なされるかを具体的に吟味することによつて、右の支配的契機に基づいて設定せられる典型概念を *situational* に再構成することが可能となると思われる。三、集團化の三次元に関する以上の叙述は、例えばインフォーマル集團が小集團に、基礎社会が大集團に對應して指定される様に集團規



模の大小、若くはこれに対する接近の態様（巨視と微視）の区別に限定されるものではなく、総じてその何れの場合についても適用されてしかるべきである。われわれは *amorph* な *consensus* の上に成立する「大衆」*mass* や「自覚された階級」を主観的次元の集団化過程に認められる「大規模集団」として、また「アナタハン島」の如き特殊な環境的状況下に成立する小集団の形成事実を客観的次元に制約せられたものとして理解することが出来るであろう。総じて集団過程に関する右の理解は、集団過程のダイナミックな把握を通じてその間に脈動する集団化の法則性の確認に至る一連の考察を当然要請するに至るであろうが、以上に提示せられた見解は、経験的事実による検討と論理的整備の態勢に於て未熟な一つの構想の見取図を示したに止まり、今後の理論的展開を予想する一つの序説として受取られれば幸いである。

## 文 献

1. 安西文夫 集団研究の新たな段階 人文研究 4の3 (1) 昭和28年
2. 中島龍太郎 知識層の問題 人文研究 4の11 昭和28年
3. Homans, G. C.: The Human Group, 1950
4. Merton, R. K.: Social Theory and Social Structure, 1951
5. Lundberg, G. A.: Social Research, 2nd ed. 1942 (邦訳) 昭和28年.
6. 中島龍太郎 社会的因果設定の論理 社会学評論 13. 14号, 1954年
7. Hertzler, J. O.: Social Institution, 1946
8. Hartley E. L and R. C.: Fundamentals of Social Psychology, 1952
9. Timasheff, N. S.: The Basic Concept of Sociology, Journal of American Sociology, Vol. LVIII, No. 2, 1952
10. Roethlisberger F. J. and Dickson, W. J.: Management and the Worker 1939
11. La Pièrre, R. T.: Sociology, 1949
12. Pfauts, H. W.: The Current Literatur on Social Stratification, in A. J. S. Vol. LVIII No. 4, 1953
13. 例えば毛沢東・劉小奇 整風文献 (邦訳) 劉小奇 民衆を組織する上でのいくつかの基本的原則 (選集邦訳第二卷) 1952年